

男声合唱組曲「尾崎喜八の詩から」

1975年1月18,19日 関西学院グリークラブの第43回リサイタルにおいて委嘱初演された作品。作詩者である尾崎喜八は大正・昭和期にかけて活躍した詩人であり、その詩風から「自然と、心から詩を歌いだすこと——それが詩人尾崎喜八の全生命である」と評される。彼の素朴で人間的な自然愛溢れる詩に、多田武彦が曲をつけたのが本作品である。多田武彦・尾崎喜八両氏による作品は本作品のほかに「尾崎喜八の詩から・第二」「樅の木の歌」「秋の流域」「尾崎喜八の詩から・第三」「歲月」「花咲ける孤独」「八ヶ岳憧憬」がある。

尾崎喜八について

1892年(明治25)東京に生まれ、1974年(昭和49)鎌倉にて没。京華商業学校卒業後、高村光太郎の知遇を得たことが彼のその後の芸術活動に大きな影響を与えたとされる。武者小路実篤や千家元麿など白樺同人との交流を深めつつ本格的詩作活動に入る。山岳と大自然を愛し、それを主題とした多くの詩や散文に優れた作品を残した。またクラシック音楽への造詣も深く、日本で最初にベートーベンの第九交響曲終楽章のシラー作「歓喜に寄する」の日本語訳詞を手がけた事も知られている。晩年に著した音楽随筆集「音楽への愛と感謝」は詩人が綴った回想録として高い評価を得ている。

1945年(昭和20)5月、東京の自宅が空襲で全焼、千葉、東京の知人宅を転々とするが、どこか遠く純粋な自然に囲まれた土地への憧れが強まり、同年9月に長野県諏訪郡富士見村の元伯爵の家を借り移り住む。戦前から長野の自然と山々への愛着は深く1942年(昭和17)に刊行された「高原詩抄」の中の詩「美ヶ原溶岩台地」は、美ヶ原頂上の「美しの塔」に刻まれ良く知られている。また長野県下の小中学校を中心に多くの校歌を作詞した事は、彼の信州への愛着の深かさを感じさせる。この地での7年間は、苦しいながらも、富士見の寒村に溶け込み、昼は農耕に従事し、夜は村の青年たちと文学や自然を語り交流したと言われている。

そして、この自己を見つめ、誠実に自然の摂理を深く観照し、強い意思を持って清貧の中から彼の代表的詩集の一つ「花咲ける孤独」が生まれた。1952年(昭和27)には東京に戻り、晩年は鎌倉に移り住み82歳で亡くなった。

作曲家：多田武彦

多田武彦は旧制大阪高校在学中に合唱を始め、後に京都大学法学部を卒業。大学在学中、京都大学男声合唱団の指揮者として活躍する。1954年に北原白秋の詩による男声合唱組曲「柳河風俗詩」を発表。以降、多数の作品を発表した。現在でも、作曲や、合唱指導などの活動を展開している。その作品数は組曲単位だと70作を超え、単品でカウントすると500曲に及ぶ。

多田武彦作曲「尾崎喜八の詩から」

多田武彦の作風は「日本の近代詩」に寄り添う形で作曲されたアカペラの男声合唱組曲が特徴だが、特に尾崎喜八の詩に対する思いは強く、第2、第3と最近の5作品を含めて8つの組曲を作っている。氏は「尾崎喜八の詩から」について次のよう

にコメントしている。

「自然と心から語り合える詩を歌い出すこと」—それが尾崎喜八の全生命であると言われるほど、その詩は健康な自然と、それに晴れやかに生きている人間を歌っている。(中略)この組曲は尾崎喜八の自由詩に基づく音楽的絵画の陳列で、各曲の間の連携は無い。しかし、一つ一つの作品の中に特色を出してみた。何度読み返しても飽きない良い詩であったので、久しぶりにさらっと書けた…。

第一作は多田武彦43歳の時の作品である。

【曲目解説】

I 冬野

詩集「花咲ける孤独」(昭和30年刊行)より。千葉県三里塚の真冬の原野の夕景を詩ったもの。「竖琴のような夕景」「風の長い琶音」「星が一つ もっとも高い鍵を打つ」と、尾崎喜八の詩には文学と自然と音楽の三要素が共存している。戦争終結直後の三里塚の真冬の灰色の荒野に立ち、彼は何を想ったのだろうか。

II 最後の雪に

詩集「高層雲の下」(大正13年刊行)より。尾崎喜八が東京都大田区戸越公園の近くに住んでいた頃の詩。喜八の住む家の窓の外から見える、晩冬の雪の降る様子をワルツを踊る老嬢に見立て、儂くも美しく消えていく雪の貴さや、やがて訪れる春に思いを馳せつつ詩作に耽っている様子を詩ったもの。

III 春愁

—ゆくりなく八木重吉の詩碑の立つ田舎を通過して—

尾崎喜八が東京都世田谷区上野毛を散策した時の詩。副題にある八木重吉は、男声合唱組曲「雨」(多田武彦作曲)の終曲「雨」を作詩した大正期の詩人。偶然に八木重吉の詩碑の前を通りかかった尾崎喜八が、自身の70余年の人生を回顧している。

IV 天上沢

詩集「旅と滞在」(昭和8年刊行)より。長野県天上沢の風景を詩ったもの。尾崎喜八は自然観察のために登山を好み、山を題材にした作品を数多く残している。穂高連峰の溢れる自然と、その山に挑む登山者の姿を描写したこの詩は、人間と自然との調和を求める尾崎喜八の詩の神髄であると言える。

V 牧場

詩集「高原詩抄」(昭和17年刊行)より。長野県御牧が原の情景を詩ったもの。放牧された牛たちの暮らす牧場の悠然とした一日の様子を写実性豊かに描写している。

VI かけす

冬野と同じ詩集「花咲ける孤独」より。長野県富士見峠の情景を詩ったもの。尾崎喜八は昭和21年に長野県諏訪郡富士見村に転居し、数年間その地に暮らした。青く澄んだ秋空をかけすが高く飛んでいく様子が描かれている。